

○令和4年度 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

「安全管理・登山研修」(R4.6. 4 (土) ~5 (日))

令和4年度 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業 開催要項
安全管理・登山研修

本事業は、NEAL インストラクター・コーディネーターの資格更新に関する「安全管理講習」として申請できます。

- 1 趣 旨 登山を中心とした野外活動に関する基本や安全管理に関する知識・技能を学び、青少年の健全育成に携わる指導者の資質向上を図る。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大雪青少年交流の家
(企画・運営 北海道「体験の風をおこそう」推進協議会)
- 3 共 催 北海道青少年教育施設協議会
- 4 後 援 北海道教育委員会 北海道小学校長会 北海道中学校長会 北海道高等学校長協会
上川管内教育委員会連合会 美瑛町 美瑛町教育委員会 ※予定
- 5 期 日 令和4年6月4日(土)~5日(日) 【1泊2日】
- 6 会 場 国立大雪青少年交流の家 ※1日目はオンライン参加可能
- 7 対 象 教員、ボランティア、青少年教育施設指導者、自然体験指導者、その他登山に興味のある方
- 8 定 員 30名 ※人数が多い場合は抽選となります
- 9 講 師 大城 和恵 氏 (北海道大野記念病院医師・国際山岳医)
- 10 参加経費 1,800円 (内訳: 夕食 780円, 朝食 490円, シーツ代 300円, 傷害保険料等 230円)

11 日 程

日付	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1日目								14:00 集合 式	①講義・ 演習	②講義・ 演習	夕食	③講義・ 演習	入浴	22:00 就寝	
2日目	起床・ 朝食		④講習		集合 式	12:00 解散									

12 プログラム

項 目	内 容
①講義「野外活動の教育的意義」 演習「アイスブレイク」	登山を含む野外活動の教育的意義について学習します。 また、参加者同士がお互いを知り、今後連携・協力ができるような関係作りの機会とします。【講師：国立大雪青少年交流の家 所長】
②講義・演習 「登山の安全管理（リーダーの役割）」	登山において注意することや事前に確認する事項や準備するものについて学びます。 【講師：北海道大野記念病院医師・国際山岳医 大城 和恵 氏】
③講義・演習 「野外活動におけるリスクと対処」	登山を含む野外活動において起きやすいケガや病気のリスクを学び、ケガや病気の初期対応について実習を交えて学びます。 【講師：北海道大野記念病院医師・国際山岳医 大城 和恵 氏】
④演習「野外実習」	屋外活動の際のリスクについて考えながら、屋外で実際にケガや病気の対処についての実習を行います。 【講師：北海道大野記念病院医師・国際山岳医 大城 和恵 氏】

※NEAL インストラクター・コーディネーターの資格更新に関する「安全管理講習」については、別紙をご覧ください。

◆目的
 登山を中心とした野外活動に関する基本や安全管理に関する知識・技能を学び、青少年の健全育成に携わる指導者の資質向上を図る。

◆参加実績 (定員 30名)
 参加者 30名 (交流の家の職員を含む)
 ・体験活動指導員 (登山会) 4名
 ・市町村教育委員会 3名
 ・青少年教育施設 18名
 ・その他 5名

◆プログラム

【1日目】

- ①「体験活動の意義」「アイスブレイク」・・・ (80分)
 講師：藤井 玄 氏 (大雪青少年交流の家 所長)
 参加者に体験活動の意義を伝えるとともに、参加者同士の関係作りのためのアイスブレイクを行った。
- ②「登山の安全管理 (リーダーの役割)」・・・ (90分)
 講師：大城 和恵 氏 (北海道大野記念病院医師)
 野外活動におけるリスクと対策について、おける実際のケガや病気のデータを元に学習した。
- ③「野外活動における安全管理」・・・ (90分)
 講師：大城 和恵 氏 (北海道大野記念病院医師)
 ②の講義で学習した内容をもとに、サムスプリントや包帯三角巾などを使ってケガの対処について屋内で実習を行った。
 (足首、腕の固定)



【2日目】

④「屋外実習」・・・(150分)

講師：大城 和恵 氏（北海道大野記念病院医師）
ハイキングコースや交流の家の敷地内で捻挫・熱中症の対処について実習を行った。
グループに分かれてシナリオに基づいて傷病者の状態参加者は確認や対処の方法、搬送の要請などの判断について考えた。



⑤「ふり返り」・・・(30分)

研修を通して学んだことをもとに、自分の実践にどのように活用できるかについてふり返りを行いグループで、共有した。



◆事業運営・企画のポイント

- 北海道の登山で実際に多いケガ・病気を実際について学び、リスクを減らすための取組について考えられるようにした。
- 実際の傷病に対してどのような基準で判断するか、どのような対処をするべきかなど、指導者として必要な観点から考え、それを元に実習で再確認できるようなプログラム構成にした。
- 屋外の実習では、傷病者に対して実践に即した対応ができるように参加者が考え、行動できるようにした。

◆参加者の声

- 救助する側の意識も大事だが、患者側の気持ちも体感できたので、貴重な経験ができた。
- 参加者の年齢によって起こりやすいケガや病気が違うので、自分の持ち物があらゆるケースに対応できるような中身でなければいけないということを学んだ。
- 将来自分が教育者（保育者）になった際に、子どもたちを守るために活用できると思った。
- 自分の身を守るうえで、事前の準備確認など意識できるようになったと思う。
- 出発前の体調確認や慣れていない人への脱水予防や低体温予防について徹底した促しも必要だとわかった。

（事後調査（9月実施））

- 事業活動では、子ども達や年寄りと一緒に活動することが多くなり、何か起きてからでは遅いので、ケガや病気を避けるために自分なりに危機意識や事前の準備を心掛け、事業活動行うようになった。
- 研修を受けた後に職員研修で学んだ応急処置の実践を行った。前腕、肩の三角巾の吊り方、副木を使用した足首の固定、低体温熱中症の措置について実際に参加者同士で研修を行い、シーズン前に学習する貴重な機会となった。

◆事業の成果

- ①自分が子どもたちを自然の中に連れて行くうえで、事前の準備や指導（体調確認や活動に関する指導）を確実に行うことで、活動におけるリスクをコントロールする重要性に気付くことができた。
- ②子どもたちが自らの安全管理をすることは難しいため、指導者が安全確認を行い、安全に活動する環境を整備することが重要だと参加者に理解させることができた。
- ③実際の屋外での傷病の場合、知識をどのように活用するのかを実際に体験することで、自分たちが実際に傷病者の初期対応をする責任を負っているという意識を高めることが出来た。